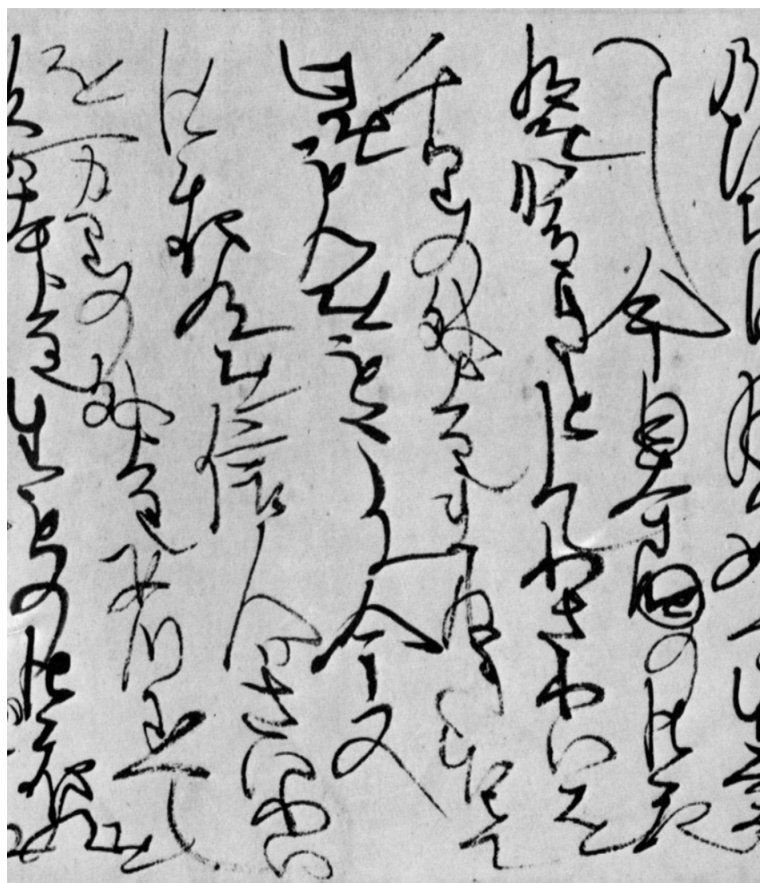




今月の御聖訓



【べし。】今日日本の法華

経をかたきとして、わざわいを

千里の外よりまねき出せり(↑て)。

此^レをもつてをもうに、今又

法華経を信^{ズル}人は、さいわい

を万里の外よりあつむべし。

【重須殿女房御返事(十字御書)】

全集一四九二頁

目 次

今月の御聖訓

巻頭言	菅野憲道	1
お講講話 「ものの見方、捉え方」	菅野憲道	2
御書と日興上人〔170〕	松田銘道	8
「興風談所の研究成果(八)」	菅原関道	10
【寄稿】「吉野山周遊(四月三日)」	森 秀之	14
「先駆者の地震の予知をここに証明する」	宮崎和子	16
読書案内『追懐の筆』	松田銘道	18
〈作品を贈呈します!〉		19
恵日だより		20
四月の行事 皐月詠草 恵日俳壇		
「日曜講話」		21

巻頭言

目に見えぬもの

菅野憲道

「闇の夜に鳴かぬ鴉からすの聲こえきけば 生まれぬ先の父ぞ恋しき」

この歌は一休の作とも白隠の作とも言われるが、詠み人知らずというのが本当らしい。

闇夜の鴉とは目に見えぬものことで、金工や漆芸の画題にはよく見かける。鳴かぬ鴉の声とは、声にならない声、声でない声に耳を傾ければ、自分も父母から生まれてくる以前からの因縁があったはずで、人は生死の冥くらきより来たりて冥きへ去って、どこへゆくのか知る術もないが、目に見えぬ過去世からの因縁を思えば父母未生以前の父たる仏こそ恋しいという意味だろうか。

物質科学の盛んな現代は、目に見えぬものを忘れがちだが、金子みすゞの詩をあげるまでもなく、見えるものより見えないものの方が遥かに多いのではないだろうか。人の心、時間、空間、宇宙、因縁、真偽、未来、コロナウイルス……おもいつくまま挙げてみるが、何よりも自分のことが見えないのかも知れない。

日蓮大聖人も見えない無形のものとして御書に幾つもあげられている。曰く「闇の中に影」「虚空に鳥の飛跡」「大海の魚の道」「睫まつげ」「虚空」「空飛ぶ鳥の跡」等があり、一例をあげると法華経を信ずる日女御前の胸中には、凡夫の目には見えぬ妙法蓮華経の宝塔が在すことをのべられている。

寿命品では久遠の本仏は「我れ常に此に住すれども、諸の神通力を以って、顛倒の衆生をして近しと雖も見えざらしむ。」とあって、ここにも正信なくしては見る事ができない世界があることを説いている。



お講講話(要旨)

拝読御書 「上野殿御返事」(全集一五五九頁)

ものの見方、捉え方

菅野憲道

《時と場所によって変わる価値観》

この御書は、弘安二年に推定されておりますが、富士上方、上野郷の領主・南条時光さんが、身延山中の日蓮大聖人のもとに使者を遣わして、鷲目一貫(穴あき錢一貫文・一千枚)、塩一俵、里芋一俵、生姜少々を、御供養を届けられたことに對する礼状としての御書です。

冒頭のところから、

「あつきには水を財とす。さむきには火を財とす。……」

(全集一五五九頁)

とあって、物事の価値は時と場所等によって変わることを具体的な例を幾つか列挙して説かれております。

これらの記述を見ると、いかにも当時の様子がなんとなく想像できるものがあります。

取り分け、最初の方には寒さとか飢え、食糧難や戦乱といった時には、食料やあるいは暖を取る薪などが大切になってくるといわれ、また、火山灰が降り積もった関東平野では、火山灰

起源の粘土質の赤土で、建築・土木に利用される安山岩や花崗岩のように硬い石がないことから、富士や身延では厄介な岩石類も「武蔵・下総には石を財とす」、石材として重宝されると仰せです。

次いで、

「此の山中にはいえのいも(芋)・海のしほ(塩)を財とし候ぞ。竹の子・木の子等候へども、しほ(塩)なければそのあぢわひつち(土)のごとし。」(同)

と、身延の山中では、いえのいも(里芋)や塩は何よりも重宝されているのです。

保存食にもなる里芋は高温多湿で日当たりのよい土地を好みますから、山奥では栽培が難しかったようです。

また塩は、駿河の興津などの海岸一帯で天日干しで作られたのですが、その塩は富士川沿いに甲斐にも送られて重要な交易品だったのです。

有名な伝説ですが、戦国時代、甲斐の武田信玄は、同盟関係が破れた今川氏真に塩留めされて非常に困ったことがあったの

ですが、その時に越後の上杉謙信が、日本海産の塩を送り届けたという、「敵に塩を送る」の語源になった美談がありますが、遠い昔から、山の民は海の塩なしには生きて行く事が出来なかったのです。

この時、南条時光さんは、大聖人のもとに塩と里芋とはじかみといったものをご供養なされたのですが、この御書とは別の御書でも、だいたい似たようなもの、例えば芝川で取れた川苔とか、芋や麦といったものをご供養されています。ただ米は非常に少ないのは、恐らく上野郷一带は溶岩台地のような土質で、水利も不便な水田が作れないような土地で、農地開発が始まったばかりだったようです。「米一斗」といった表記が時々出てきますが、わずかな米でも非常に貴重だったようです。また、

「竹の子・木の子等候へども、しほ(塩)なければそのあぢわひつち(土)のごとし。」(同)

とあって、筒でもきのこでも、塩の味付けもなく生でただ湯がいて食べるだけでは、まったく味わいがなく、まるで土を噛むようだというわれています。

それから、「銭一貫文」というのは、ちょうど平清盛が日宋貿易を盛んにすると大量の宋銭が入ってくるようになって、日本はこの頃から急速に貨幣経済が発達して来るのです。

当時の記録などには、「銭の病が流行っている」ということ



大聖人のもとへ度々御供養を届けられた上野殿(御一代絵図より)

が書かれており、鎌倉後期には年貢や賦役も錢貨で支払われたり、為替制度みたいなことまで行なわれるようになり、やや時代は下りますが、室町期には日明貿易によって永樂通宝などの明銭が大量かつ日本中に流通し、経済の制度も貫高制となつていきます。

鎌倉時代は貨幣経済の揺籃期ですが、大聖人は金銭の有用性も、限界性も充分心得ておられたように思います。その上で大聖人のもとに届けられた御供養は、檀越の信心の賜物として、その志を尊ばれております。

ここに挙げられたご供養の品々は、その時と場所によってその価値はまったく違ってくるのであって、とりわけ身延の山中のような食料も乏しく、食糧や金銭、生活用具は無いに等しいようなところでは、施主が普通に考えている以上に、一々に大事な財宝であり、その品々に込められた法華経・大聖人をお護りしようという志こそ、成仏に導く一念信なのですと仰っているのです。

こういふなんでもない御書の中に、一つは、南条時光は田舎の若き小領主であつたのですが、田舎とはいえども、所領からは芋とか麦、あるいは生姜とか大根といったものは採れますから、それをしばしば大聖人のもとに届けられたのです。南条さんからすれば、いつもの月並みのものと思つて、なんともなく送られたのかも知れませんが、大聖人はその志を

非常に大切にされて、その都度、志の大切なこと、尊いことを一々に書かれているのです。

このことは、二年後の「上野殿御返事」に、同じような御書があるのですが、

「いゑ(家)のいも(芋)一駄・ごぼう(牛蒡)一つと(苞)・大根六本。いもは石のごとし、ごぼう(牛蒡)は大牛の角のごとし。

大根は大仏堂の大ききのごとし。あぢわひは忉利天(とうり

てん)の甘露のごとし。石を金

にかうる国もあり、土をこめ

(米)にうるところもあり。千金

の金をもてる者もうえてしぬ、

一飯をつとにつめる者にこれ

をとれり。經に云く『うえたる

よ(世)にはよね(米)たつとし』

云云。一切の事は国により時に

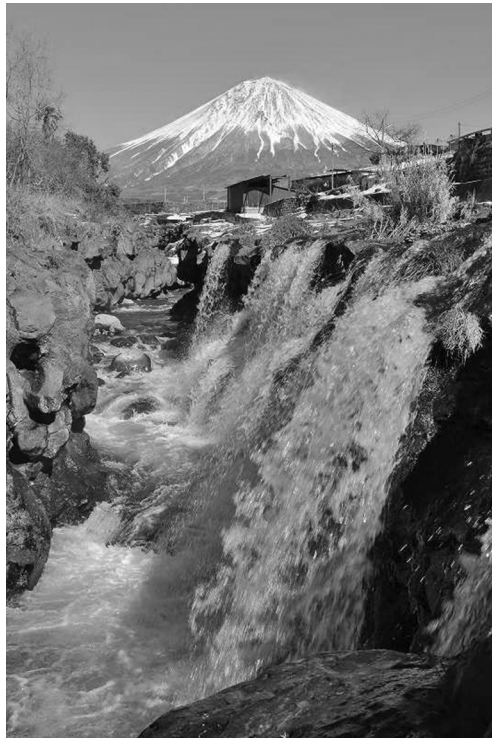
よる事なり。仏法は此の道理を

わきまうべきにて候。」(全集一

五七九頁)

と述べられます。まことにユニークな譬喩です。よく干してある里芋は、まるでゴロゴロと石ころのように見えます。また太い牛房^{ごぼう}は牛の角のようであり、大根は大仏堂の大釘のようであるといわれるのです。

鎌倉時代のことですから、みな野生種に近いような農作物であったと思います。今時の野菜は品種改良を重ねて、何を食べても同じような味がしますが、昔は胡瓜のヘタにはエグ味があ



川苔も取れた上野郷の芝川(精進川)

り、人參には独特の癖があり、キャベツでもいかにも青臭いような気がしたのですが、今時の野菜はたいていどれを食べても一緒に、淡泊でわずかに甘みのあるような画一的なものになつてしまったようです。

それは余談として、大聖人がそういう一つ一つのことについて、贈ってくれた相手に対し心の中に生じた感興をストレートに表現し、喜んでいることをより確かに伝えるための方法に用いられているように思います。

その中で、

「一切の事は国により時による事なり」

とは、仏法もそれと同じことですから、目の前の作物の話題から転じて、仏法の基本というか、法門のありやうということを、一言で語られ、これから法門を記されるかと思いきや、一転、
「又々申すべし」(全集一五五九

頁)

と、筆を置かれております。この時期の大聖人は、消化器系の疾患で体力的にはかなり衰えられていて、時には御書を代筆させるようなこともあったようです。ここでも途中で書かれて、続けようと思われたのでしょうか、恐らく疲労を感じられたのか、一言だけ書いて、あとはまたの機会にということ、筆を置かれているようです。

《凡夫の見方と仏様の見方》

考えて見ると、ものごとの価値とか善悪等の判断基準は微妙に変わって行くものですが、それが時と人と場所によるということがわからなくて、一つの事に固執して、先入観念や固定概念となってしまうことがあります。しかも我見や偏見はいつも「自分は正しい」という思い込みと一体で、その自覚がありませんからに重症になるほど手が付けられません。

法華経方便品では、仏様がこの世の中に出現した一番の理由とは、すべての人々に何とかして仏知見を開かしめ、示して、悟らしめ、入らしめようということだと記されており、これを開・示・悟・入の四仏知見といいます。これが法華経の前半のテーマです。それまでの経説とは違って、一切衆生は本来必ず成仏できる可能性を持っていることを明かした画期的な教えです。それが一念三千という法門に展開されていくのですが、その法門の根拠は四仏知見と十如是の経文です。十如是与長行の四仏知見は開三顯一の法門の中心ですが、唯一仏乗も十界互具も一念三千の法門へ通ずる入口なのです。『法華玄義』には、衆生が本来一念三千の仏種を蔵しているから「開仏知見」といって開くというとあります。ここに一切衆生も仏知見の妙法蓮華経を受持することで己心の仏性を開き成仏できることを保証されたのです。

そうすると、仏知見と我われ凡夫のものの見方とはあきらかに違うのであって、違うというのは何が違うのかというと、我われの見方は、煩惱による見方で、これに見惑・思惑の十種が

あります。見惑は五利使といって人を鋭く使役する思想的煩惱のことで身見（我見）、辺見（断見・常見）、邪見、見取見、戒禁取見を指します。普通の人の自我意識がすでにして迷妄なのです。因果の理法を信ぜず「死んだらお終い」というような見方も邪見なのです、また思惑は五鈍使といって貧欲、瞋恚、愚癡、慢心、疑惑といった、こちらの方は我われを強く動かしてくるような身体的欲求であるとか情緒的な煩惱があるのです。これらの見思惑は我われを突き動かし、こき使ってくるような心の病なのです。

現代人が、自我の確立などとおだてられて、我慢偏執や我利我利の自己中心主義に陥りやすいのは、要するに自己の見方、捉え方がおかしいのです。その迷妄とはまず確実に自我とか自己という主体があつて、その自分があらゆるもの、例えば自分の家を所有してるとか、車を所有してるとか、あるいは品物を支配しているとか、そういうことを絶対的なものと思ひ込んでいるということなのです。

しかし、そういう自我というのは、実態としていつまでもあるものではないし、それから昔もなかったのです。何十年前に、この世の中に生を受けたのでしょうか、その時は全くの裸で生まれてきたのですが、その時には自分がとか私がついていう自意識はなかったはずなのです。

それがだんだん長ずるにしたがつて、私が、自分がという意識が生まれてきて、なんとなく自分の力で生きているような気味でいるのです。

しかし、自分の力で生きているなどというのは、ほとんどわ

ずかなことであって、大半は社会の恩恵によって生かされていると言った方が適切だと思います。ここに仏教の知恩報恩の教えの意味があるわけですが、このことはまた別の機会に譲りたいと思います。

簡単に言えば、赤ちゃんのこと考えてみたら分かりますが、赤ちゃんは自分の力で生きていられないのです。一日たりとも生きていられないのです。常に、何時間おきにミルクを与えて貰ったり、あるいはおむつを替えてもらったり、あやしてもらったり、とにかく限りなく世話してもらわないと生きていけないのです。自分で出来ることなど微々たるものです。

それからもう一つは、手足とか頭とか、あるいは心臓とか、そういったものを誰が作ったのかということです。誰が作ったわけでもなく、何か大きな自然界の摂理が働き、光、空気、水、大地の力に預かって生命というものが生まれたのです。

そう考えて見ると、我われのいう自我とか自己というのは、仮にあるものであって、昔はなかったし将来もないのですから、確実に存在するものではないのです。

その自分が、いかにも世界を理解したような錯覚を起こして、なんでも分かっているような気であるのです。そこから判断していくと、色々な間違いが生じてくるということは、当然のことなのです。

ですから、ものの見方、価値観とか人生観とか世界観みたいなものは、みなその時と場所と場合によってどんどん変化するものであるし、また変えていかなければ対処の仕方を間違えてしまうことになるのです。

《命の根源に宿されている仏種》

法華経信仰の初步に十界論がありますが、これもまたものの見方、捉え方の一つともいえます。普通には地獄や浄土・仏国土を外の環境や社会・世界と捉えがちです。浄土教の西方浄土などそのたぐい입니다。しかし十界論とは心の状態を質的に十の段階に類別したもので、大聖人が「瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡かは畜生、諂曲は脩羅、喜ぶは天、平かなるは人なり」（観心本尊抄）と説かれるように、例えば瞋りの心が世界観に反映して地獄界を現成するということです。

しかも法華経は一念三千を説くのですから仏国土も一念に具わることを忘れてはなりません。いまにもめている戒壇論にしても、本尊所住の所とは一念信解の世界であり、その一念の仏国土に建立する戒壇本尊であるという大前提を見失って、世俗社会の政治権力と結んで、覇権主義に陥るような戒壇論では、到底、大聖人の本意とはいえません。

多人数を頼んで相手を圧倒しようというような発想や、権力に訴えて力尽くで人を支配しようというような心は修羅の命なのです。

ですから、ものの見方の前提として、まず我が一念を、妙法蓮華経の御本尊という鏡に照らして、それを清浄の信に修めていくことが肝要です。この一事をもつて瞋りの心が起れば慈悲の心に変え、迷いの心が起れば、崩れない金剛信に変えていく、その根本が妙法蓮華経を信ずること、御本尊に向かって南無妙法蓮華経と唱えることなのです。

ともかく、人生のいろいろな問題について解決を計るのに、外

側のいろんな社会制度を変えたりとか、金銭で便利な新製品を購入したりとか、あるいは人間関係や生活習慣を見直したりすることも大切ですが、自分の心を変えていく、自分の考え方をかえていくことをしないと、根本的な解決にならないことも多いのです。

例えば、忍耐心ということがそうです。法華経には忍辱の鎧とまで表現されて、法のためにはあらゆる難事を耐え忍ぶように教えておりますが、現代では意に沿わないわずかな不満でもあると忍耐できずに退転する姿も見られます。それは日常生活でも我慢することが少なくなつたため、忍耐心も薄くなって、自己をコントロールできなくなっているようにも思われます。また我慢せずに自己の権利を主張しろというような社会の風潮にも問題があるように思います。

今の時代、すべてのことを対峙する相手や制度など、外界の問題として解決を計るような風潮がつよく、自身の価値観や世界観の問題とは考えもしない人が多いでしょう。人間性そのものが、自己中心・高慢・非寛容・強欲な人が増えてきているような気がするのです。

一番大切なのは我が一念にどういう法を据えて行くかということだと思ふのです。

それこそが法華経の一番のテーマです。譬中明珠の譬えでも、衣裏珠の譬えでも、どなたもが明らかな智慧とかぎらない慈悲心と真理に基づいた妙法蓮華経の仏性をそなえていることをくり返し教えているのです。誰もが無限の可能性を秘めた仏の種



南条家屋敷跡と伝える妙蓮寺(山門)

を持つているということですから、そのことに気がついて自身を磨いて、自分自身の心を少しでも向上させていくことを目標にして行かれたら、世の中の環境の見え方も世界観も違ってくるのではないかと思います。

我われは同じ令和三年の同じ日本社会に生を受けて、百年足らずの生を送っているのですが、実際にはその人の心のありようで、全く違った世界に生きているのだと思うのです。

ある人は身体問題に悩み、ある人は生きる不安に怯え、またある人は快樂に迷い、心の中ではあたかも六道を浮沈するような四苦八苦にさらされてなお気付かないのです

我われはこうして法華経の信仰に巡り会ったのですから、わが一念に決定信を据えていただいて、心から自受法樂し、自然に報恩のお題目が口より出るような、そういう心境にまで達していただきたいものです。

何といつても、大聖人の時代、今の我われの時代と比べたら、便利なものなど何もない、美味しいものなど何もない時代に、これほど大きな情熱と勇氣と希望をもって生きられていることは、まったく信仰の力以外何ものでもないと思います。

どうか、自身の命の根源に、本当の仏の種が宿されていることを信じて、精進していただきたいと思ひます。

南無妙法蓮華経

(了)

【御書と日興上人（一七〇）】

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一〇四）

松田 銘道

前回は、『法華取要抄』の⑭の問答における「妙法五字の弘通の先相」と、⑮の問答における「眼前の前兆」についてみてきました。

今回は、⑯の問答からみていきます。

ここでは、「眼前の前兆」について、「多くの災難はどうして起こるのか」との問いを設け、それに対して、

「最勝王経に云く『非法を行ずる者を見て当に愛敬を生じ善法を行ずる人に於て苦楚して治罰す』等云云。法華経に云く。涅槃経に云く。金光明経に云く……大集経に云く……仁王経に云く……此等の明鏡を齎て当時の日本国を引き向かふるに天地を浮かぶること宛も符契の如し。」

と、『立正安国論』にてすでに災難が生

じる原因の依文に用いた『最勝王経』『大集経』『仁王経』等の経文Ⅱ「明鏡」から現状を照らすと、「天変地異などの大難のありさまは、あたかも割符を合わせたように合致」しているとされています。

そして、そのような災難の状況について、「眼有らん我が門弟は之れを見よ」と、門弟たちに対して、その現状を眼を開いて見るよう指示されています。

また、その現状から何がもたらされるのかについても、

「此の国に惡比丘等有りて、天子・王子・將軍等に向かひて讒訴を企て聖人を失ふ世なり。」

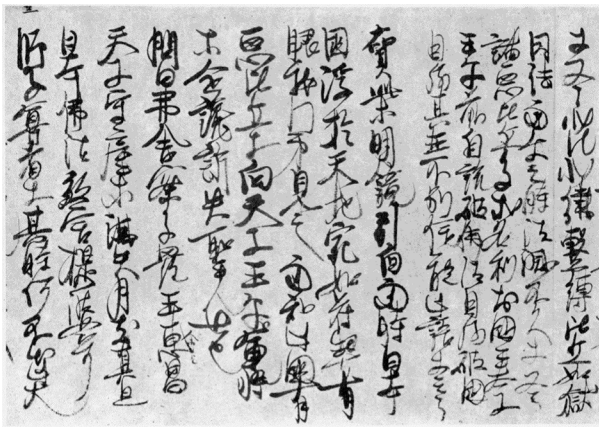
と教示されています。

すなわち、門下が眼を開いて見ること

とは、極樂寺良觀や法然浄土教徒などの「惡比丘等」が、幕府の「天子」等に「讒訴」し、竜口では「聖人（宗祖）」の頸を刎ねて「失ふ」ことを「企て」たように、法華経を行ずる者を亡き者とする大難が生じることへの覚悟であることが、文面から知れます。

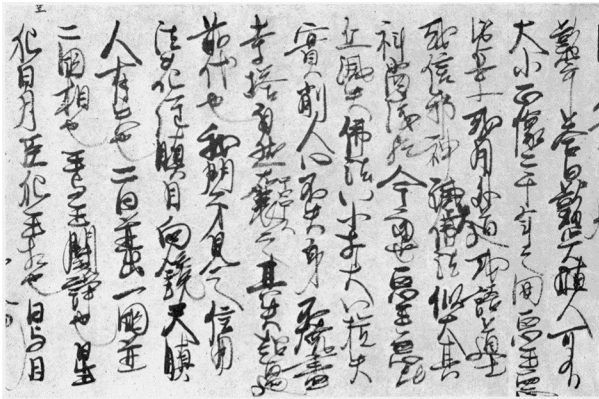
そのことから、最後の⑰問答では、迫害を受ける「聖人」Ⅱ「上行菩薩」との確信も示されています。順次見ていくと、まず、「印度の弗舎密多羅王、会昌天子と通称された中国の武宗、日本の物部守屋が仏法を弾圧したり滅亡させた時や、提婆菩薩や師子尊者らが殺された時に、どうして宗祖が受けたような大難はなぜ起こらなかったのか」との問いを設け、それに対して、

「災難は人に随ひて大小有るべし。正像二千年の間の惡王・惡比丘等は、或は外道を用ひ或は道士を語らひ或は邪神を信ず。仏法を滅失すること大なるに似れども其の科尚浅きか。今当世の惡王・惡比丘の仏法を滅失するは、小を以て大を打ち、権を以て実を失ふなり。人心を削りて身を失はず、寺塔を



『法華取要抄』（ご真蹟中山法華経寺蔵）

⑯の問答では、法華経を行じる宗祖がなぜ迫害を受けるのか文証を示し、そのことから「眼有らん我が門弟は之れを見よ」と、門下にも法難への覚悟を求められた。



『法華取要抄』（ご真蹟中山法華経寺蔵）

⑰の問答では、佐渡で確認された二つの天変は、「天の憤り」であり、「人の失」の争乱が生じる前兆であると示し、「我が門弟之れを見て法華経を信用せよ」と、門下に対して法華経を信じることを求められた。

- ① 文永十一年（一二七四）一月二十三日の二つの太陽の出現 〓 「天の憤り」は、「一つの国に二人の国王が並び立つ」 〓 「人の失」の前兆。
- ② 二月五日の二つの明星の出現 〓 「天の憤り」は、「太子と太子との諍論」 〓 「人の失」の前兆。
- 以上の災難が起こることを予証されています。

焼き尽くさずして自然に之れを喪ぼす。其の失前代に超過せるなり。」

とのように、災難にも罪の軽重によって大小が生じることが示されています。すなわち、

- ・ 正法と像法の時代の災難は、仏教以外の外道の教えを用いたり、邪悪な神を信じたりと、仏法以外の教えから仏法を破っているものであり、まだその罪は浅いこと。

・ しかし、末法の「悪王・悪比丘」は、小乗教をもつて大乘教を破り、方便の

教えをもつて真実の教えを滅ぼし、正法を信ずる心を喪失させることから、その罪は重くなること。

このように、正法・像法の時代と末法の時代とは、仏法破壊の罪にも軽重があり、それに伴って法難もまた相違が生じると示されています。それゆえに、

「我が門弟之れを見て法華経を信用せよ。目を瞋らして鏡に向かへ。天瞋るは人に失有ればなり。」

と、再度、「門弟」に対し、「現前のありさまをよく見」て、「法華経」が真実

であると「信用」し、その教えを「鏡」として眼前の「天の憤る」 〓 災難は、「人に失」 〓 法華経を行ずる者を迫害する罪科であることを知れ、と教示されています。

そして、「天の憤」と「人の失」との関連についても、

「二つの日並び出づるは一国に二の國王を並ぶる相なり。王と王との鬭諍なり。星の日月を犯すは臣王を犯す相なり。日と日と競ひ出づるは四天下一同の諍論なり。明星並び出づるは太子と太子との諍論なり。」

興風談所の研究成果(八)

興風談所 菅原閑道

『興風』十五号

『興風』十五号は平成十五年十二月十三日刊で、大黒喜道「日興門流における本因妙思想形成に関する覚書(二)」、山上弘道「日蓮大聖人の思想(五)」、菅原閑道「重須本寺門所蔵の『頼基陳状』両写本について」、坂井法暉「南条一族おぼえ書き(上)」、池田令道「―新出史料紹介―日重本録内御書に関する一考察」という内容である。

大黒は日興門流上代諸師や慶林坊日隆(二三八五―一四六四)の文献を渉猟しつつ、本因妙思想の成立には①本果妙釈尊の本因妙が上行菩薩である②本因妙上行菩薩が一切衆生に下種する③久遠下種が本因妙の下種である、という三つの難関を解消する必要があるとして考察を行う。そして日興門流には独自の本因妙思想があるにはあったが、基本的には日隆教学の影響下でそれが形成されたのではないかとする。

山上は身延入山から弘安元年九月の『本尊問答抄』執筆前までを身延前期の範囲として、この時期に強調された三大秘法に

ついて論ずる。まず本門の本尊を本尊論と教主論に分けて説明し、本尊論の面では曼荼羅「本尊全体の内実が本門の教主釈尊であるとの認識に立たれていた」とし、教主論の面では末法の主師親・上行再誕の自覚が宣揚されたとして『開目抄』『頼基陳状』再治本や通称万年救護本尊の讃文等を文証に挙げる。次に本門の題目を修行論としての題目と、一大秘法としての題目に分けて説明し、上行所伝の要法五字の受持唱題が末法の修行であり、その要法五字が一大秘法であるとして、要法五字と寿量釈尊は一体不二とされていたとする。次に本門の戒壇を本門戒と戒壇に分けて説明し、上行所伝の妙法を受持唱題して不軽菩薩の折伏を行うのが本門戒であり、戒壇は四菩薩再誕の賢王が建立するもので、蒙古国王が日本の愚王を滅ぼし、新たな賢王のもとで行う公場法論の結果建立されるシナリオを想定していたとする。最後に、他国侵逼難の蒙古襲来が的中し、一国広布の順縁世界到来への期待が高まったと総括する。

重須本門寺所蔵の『頼基陳状』未再治本写本と再治本写本は従来日興筆とされてきたが、菅原は筆蹟を照合して前者が重須談所初代学頭の日澄筆、後者が日興筆であることを立証する。これがなぜ重要かというと、再治本写本の二箇所に宗祖の本地を「久成如来の御使、上行菩薩の垂迹」「釈迦如来の御使上行菩薩」と明記してあり、この文が未再治本写本にないからである。そもそも上行自覚は『観心本尊抄』に兆しが見えるが明示はされていない。明示されたのは文永十一年十二月に身延で図顕された通称万年救護本尊の讃文以外になく、御書では「日蓮上行菩薩にはあらねども」とか、「予非^{ニトモ}地涌ノ一分^{ニハ}兼^テ知^ル

此事。故_ニ前_ニ立_テ地涌之_ニ大士_ニ粗示_ス五字_ヲとか、上行菩薩・地涌菩薩ではないけれどもと謙遜した表現を用いている。そのためストレートに上行自覚を記す再治本写本は至つて貴重なのである。なお未再治本は宗祖が内容を手直した再治本に対してそう呼ばれるだけで、正しくは四条頼基が主君江馬氏に上呈した本であるから上呈本と呼ぶべきものである。菅原は再治の理由について上行自覚を後世に遺すためと推測し、右の山上論文では門下のテキスト(教材)とするためと推測する。再治本写本が日興筆と確定したことで、立正大学教授の間でくすぶっていた再治本写本の筆者に関する疑義は払拭されたのである。

坂井は富士郡上野郷地頭の南条時光父子の社会的位置を明確にするため、先行研究を踏まえつつ、新たな史料発掘の基礎作業を行う。注目すべき指摘を二三記すと、まず南条一族の発祥の地は後に鎌倉幕府執権となる北条氏や、得宗御内人となる長崎氏と同じく伊豆国であり、長崎氏も南条氏も御家人から得宗被官化したのが、形式的には依然として御家人の身分を保有していた。『吾妻鏡』が南条一族の中でその存在を大きく取り上げるのが南条時貞で、南条氏における北条氏の被官化は時貞の代であり、得宗領である駿河国内の所領を給わったのも時貞の代であろう。また得宗の側近であつた鎌倉在住の

再治本写本	祈文我上飛
日興筆蹟	祈文我上飛
未再治本写本	祈文我上飛
日澄筆蹟	祈文我上飛

『頼基陳状』両写本と日興・日澄の筆蹟対照図

南条一族は滅亡する幕府と運命を共にしたが、富士郡在住の時光・時綱らは反幕府の立場を取った。池田は新出の日重本録内御書について考察する。発見されたのは日重本録内御書の後半にあたる巻二一から巻四〇(巻二四は欠本)の計一九冊、九三通の写本御書で、この中には文禄四年(一五九五)に日重自身が書写した二通の御書が集録され、多くの日重筆が全般にわたつて書き込まれている。このことから池田は「日重は録内御書(日重本)と録外御書(本満寺録外)を同時進行的に作成していた」とし、日重の弟子日乾の所持した本満寺本と称する録内御書は初め日重が所持して後に日乾に譲つたもので、その後日重は新たに自らの所持本として右の日重本録内御書を作成するに至つたと推測し、詳細な考察を行う。

『興風叢書』〔8〕

『興風叢書』〔8〕は平成十六年十月三十日刊で、能持院日週・境持院日通筆『過去帳・日蓮門下系図』(個人蔵、興風談所寄託)を影印・翻刻し、渡邊信朝の解題を付す。本帳は表に過去帳、裏に門下の系図や先師檀越が紹介・概説されていて、本帳に見える人名は二千余、寺院・檀林名は約三百、地名は約三百余、書名は百五十余に上る。刊末の索引は利便性が高い。

本帳から日週の生没年や実績が判明した。延宝五年（一六七七）に生れ、玉沢妙法華寺二十五世の境妙院日宗を師に出家し、京都鷹ヶ峰檀林や下総中村檀林で天台三大部を学んで講師を務めるに至り、中村檀林首座にある時に日通の入門を得たが、日週は病弱のためか、譲り弟子のような形で境妙院日宗を師として出家させ、正徳四年（一七一四）八月二日に三十七才で没した。日通の所伝は『日蓮宗事典』等に記載があるが、本帳の方が詳細で、元禄十五年（二七〇二）閏八月二十六日酉刻に下総神崎村で生れ、十才で日週の許に入門、十二才で日宗を師として出家した。二十六才の時大病を患った師日宗を鎌倉で看病した際、日宗からこう厳命されている。

「宗師ノ仰ニ云ク（中略）看病無益ナリ、我レ今度ハ死スヘカラス。
重テ大病ト聞クトモ来ルコト莫レ、死ストモ来ルコト莫レ、墓參詣ニモ来ルコト無
用ナリ。唯ダ学業ヲ励シ、我カ跡ヲ相統スヘシ。是レ今生ノ暇乞ナリトテ御愁
涙ヲ流サレ仰セヲ蒙リケリ」

日宗は自分はこの病で死ぬことはないから看病しなくてよい。今後再び大病を患って死んだとしても、看病にも葬儀にも墓参にも来なくてよい。ただひたすら学業に専念して我が志ざしを継ぐべしとて、愁涙をもって今生の別れを告げたという。日通はこれに応え、膝錐の志を立てて止暇断眠の努力を重ね、五十四才で中村檀林九十九代の化主を務め、翌年には玉沢妙法華寺三十三世の法灯を継ぎ、後に鎌倉境妙庵に隠棲して、安永五年（一七七六）七月、七十五才で逝去するまで著述に専念した。

『興風』十六号

『興風』十六号は平成十六年十二月十三日刊で、菅野憲道「河東一乱と富士門徒―戦国期における富士門徒の動向―」、菅原関道「中山法華経寺聖教に見える異筆文書の考察―『瀧泉寺申状案』異筆三紙を中心に―」、山上弘道「日蓮大聖人の思想（六）」、坂井法暉「南条一族おぼえ書き（下）」、大黒喜道「日興門流における本因妙思想形成に関する覚書（三）」、池田令道「大石寺蔵『御伝土代』の作者について」、池田令道「『五人所破抄』諸本の書誌的考察」、坂井法暉「（新刊紹介）佐藤博信著『中世東国日蓮宗寺院の研究』」という内容である。菅野論文は河東一乱について概観し、その渦中にあつた富士門徒の動向を探って、教団史・教学史研究の深化に資そうとするものである。河東は富士川東岸から富士下方・上方・駿東に及ぶ一帯を指し、河東一乱とは天文六年（一五三七）から数年に及び繰り広げられた今川義元と北条氏綱・氏康によるこの一帯の争奪戦をいう。当地に所在する重須本門寺・小泉久遠寺（本寺は保田妙本寺）・大石寺・西山本門寺等は戦乱に巻き込まれ荒廃したが、その都度守護不入の安堵を求得して再興を図った。その困難な道程を菅野は関係史料を博搜して丁寧に描き出す。紙幅の関係から注目できる所見を二つのみ紹介する。妙本寺十世日継が後継を定めずに置文したことについて、貫主職にふさわしい人物がいなければ空位にして代官・老僧が預かり、しかるべき人格・学識の僧が出るのを待つという、「近世以降の貫主相承の形態とはかなり異なる考えが見てとれる」（一四頁）とし、大石寺東坊地の係争について、「これは逆に言えば、観応擾乱以降、上野郷における南条氏の所領は闕所となって、その

地頭職とともに興津氏の手に帰していたことを意味する。旧領主からの譲り状は、すでにその時点で有効性を失っていたのである。そのために、南条時綱からの譲りを根拠とする伝師側の主張は、守護方の口入れにもかかわらず、地頭興津氏からの寄進(買得)という時師側の主張の前に敗れたのであった」(五〇頁)と指摘する。歴史学者から高い評価を得た論文である。

菅原は中山法華経寺に格護される『滝泉寺申状案』の異筆を中心に考察する。本書は『真蹟集成』第三卷一一〇頁に影印があり現在容易に拝見できるが、後半三紙の宗祖に非ざる異筆は従来日秀筆あるいは日興筆とされてきた。しかし菅原は筆蹟を照合して富木常忍筆であることを立証し、訴訟知識の豊富な常忍が鎌倉に駆けつけて熱原法難の対応に加勢したことが判明した。宗祖初め門下はこの重大な危機に直面し、落ち度のないよう一致団結して慎重に対処したのであり、中世史上類のない当法難の意義を中世史の上から客観的に問い直すべきであろう。

山上は弘安元年九月『本尊問答抄』以降の身延後期の思想を、諸氏の研究成果を取り入れて以下のように叙述する。①『本尊問答抄』の題目(曼荼羅)本尊正意の教示を釈尊の相対化と捉え、それを花押の変化、本尊の「有供養者福過十号若悩乱者頭破七分」の讃文、現実の逆縁世界等から説明し、②熱原法難では門下一丸となって幕府に立ち向かい、一農民が受持唱題して迫害に耐えた。その姿に宗祖は上行所伝の妙法が確実に根を下ろしたと感じ取り「余は二十七年」に本懐を遂げたと記したとし、③『諫曉八幡抄』末文から宗祖が到達した末法教主の自覚を拝察し、④弘安の役における蒙古撤退が不軽菩薩の忍難逆化をい

っそう勧励する契機となったと述べ、⑤逆縁世界の中で法義展開する後期にあつて『三大秘法抄』は偽書濃厚であると断定し、⑥この後期の思想こそ現代社会に展開すべきものと結論する。

坂井は上野郷在住の南条兵衛七郎以降の南条氏略系図を提示して一族を解説し、その所領について考察する。そして元々所領の規模の大きくなかった上野南条氏は、鎌倉政権の崩壊にともなう得宗領没収の荒波を受けて所領を失い、徐々に文献上から姿を消して行くと結ぶ。末尾に付す「南条一族一覽表」は日本史料上に見える南条一族を年代順に列挙した労作である。

大黒は日興門流の日蓮本尊義と本因妙思想形成の関係、室町中期における畿内の勝劣派の交流と本因妙思想形成の関係、日辰の本因妙思想批判と釈尊本尊義について考察する。

池田の「大石寺蔵『御伝土代』の作者について」は、その作者について大石寺十七世日精は日時説、二十世日典は日時説、三十一世日因は日道説(初めは日道か日時か決めかねていた)、五十九世日亨は日道説であることを紹介した上で、東大史料編纂所の本書影写本と『日時訴状案』の文字を照合して本書が日時筆であることを立証し、内容的にも日時作で矛盾なしとする。本書が「日興上人御遺告 元徳四年正月十二日 日道記之」として記す「御遺告」については「日時が大石寺に伝来した日道筆「御遺告」をそのまま『御伝土代』に書き留めたものである」とする。妥当な見解である。また『五人所破抄』諸本の書誌的考察」では、諸写本を対照した結果本書は成立当初から文言の相違する二系統があつたと推測し、結論として本書は日興の下命による日順の草案・述作であるという所伝を支持する。

【寄稿】

吉野山周遊（四月三日）

大阪地区 森 秀之



延々と続く、吉野山の桜

「かえらじと かねておもえば 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる」

この歌は、楠木正行（小楠公）が、四条畷の戦いに際し、覚悟の上で後醍醐天皇

皇陵に詣で、本堂（如意輪堂）の扉に矢じりで彫んだ辞世の句で、この句をしるして出陣したと伝わり、その扉が今に残されています。

如意輪寺は、金峯山寺や吉水神社とは、谷を挟んで離れた塔尾山とうのおさんの中腹にあります。

吉野の桜が満開との情報が入り、大和上市駅に駐車し、吉野神宮から歩き出し、下千本、中千本、上千本、奥千本杜順に進んで行くと、ほぼどのエリアも満開の桜を眺めることができた散策になりました。

金峯山寺では、修験者が法螺の演習をしているのを拝見出来ました。金峰神社は奥駆道の始まりのなびき靡（大峯奥駆道の修験場の場所大峯奥駆道の修験場の場



如意輪寺内にある後醍醐天皇塔尾陵

所）があり、そこは豊臣秀頼が再建した所ですが、これには徳川幕府が、秀吉の莫大な資金を減らす仕業として、神社の再建を秀頼名義でさせ、豊臣資金を目減りさせようとしたという戦略があったよう、そのことがよくわかります。

お隣の吉水神社（南朝御所）は、四代にわたって南朝政権があった場所です。そのあと、吉野山、高城山、西行菴、青根ヶ峰とまわり、そこから蜻蛉の滝へ

下山し、西河からバスで大和上市駅と散策してきました。

歩き出しが早朝六時頃でしたので、その時間帯は人も少なく、三密を避けてのお花見散策が出来ました。

帰りのバスは、十一時三十九分発に間に合いましたので、散策は午前中で終わることができました。あいにく昼からは天気が雨模様になりましたので、早い時間に回り終えることが出来て良かったです。

さて、西郷隆盛は、西南の役の折、城山落城の前、洞窟に籠もっていた二九〇人の薩軍名簿を認めましたが、それは楠木正行が四條驛に出陣前に、将兵の名を認め置いた故事にならったことでした。そんなことや、如意輪寺にその折の扉がまだ残っているらしいといった話を、前日に家内にとしていましたので、一緒に後醍醐天皇の墓も回ることにしました。

吉野神宮は、鹿児島で代々神職をしていた私の叔父が、戦前に吉野神宮で神職として勤務していたところでもありません

た。戦前は、身分的には一応公務員であったようですが、戦後は宗教法人となりましたので神職をやめて、どういうわけか日蓮正宗・創価学会に入会し、学会では教授として、学会教学をよく学んだようです。生前に、勤めていた頃の話を探ねられたら良かったのですが、それも叶わず、今となれば残念な気持ちです。

この南北朝時代の名将・楠木正成（大楠公）と嫡嗣正行（小楠公）は、戦前の教育を受けた方なら、今だに覚えていると思います。忠孝のモデルとして神格化されていたようです。

私は、よく金剛山へ登るのですが、金剛山へ登るルートは、全部で四十七ルートほど有るようですが、その一つに赤坂古道というルートがあります。このルートは最長ルートですが、楠木正成産湯の井戸や生家跡、上赤坂城跡の名所、旧跡も尋ねることができ、私の好きなコースでもあります。

途中、明治政府の要人の名前の顕彰碑を見かけます。如何に国策として南朝を

正統化して大楠公、小楠公を引き立てているのか、がよくわかりません。



西行庵

その中で、明治三十六年（一九〇三）には、唱歌『桜井の訣別』が作られ、国民に広まりました。明治時代の国文学者で歌人の、落合直文が作詞し、奥山朝恭が作曲したようです。私も子供の頃、この歌を、戦前教育で育った父親が、よく歌っていたのを今でも覚えています。

「桜井の訣別」の歌詞です。

「青葉茂れる桜井の

里のわたりの夕まぐれ

木下陰に駒とめて

世の行く末をつくづくと

忍ぶ鎧の袖の上に

散るは涙かはた露か」

【寄稿】

先駆者の地震の予知をここに証明する

豊能地区 宮崎和子



私は不思議な自然現象にでくわした。平成五年七月、その日、仕事柄午前三時頃家の前まで帰つてくると、夜空に今までに見たこともない茶色の色をした不思議な月を見たのです。月の下に黒い雲が掛かっていたので、しばらく家に入らず見とれていました。そして次の日、奥尻島の地震があったのです。

私はその時ピンとききました。大地の異常は天を見ればわかるのだと。

それから二年にわたって、月と雲と空の全体の様子を観察してきました。次々と起きる地震を完璧に予知していったのです。

それから自信がついてきたので、お店のお客様とか、近所の人にも、二十四時間以内に震度なんぼくらいの地震が起きると教えていました。聞いた人は皆びっくりしていました。それから、これを何とか人々に教えることができないものかと考え、ある

日、池田の市役所の「なんでも相談課」へ行き、「私は地震の予知ができます」と言つて、今までの経緯を話しました。そしてこれから地震予知の情報を相談課に報告することを約束して帰り、約三カ月にわたって報告をし続け、パーフェクトに地震を予知してきました。しかし、いつまで経つてもそれ以上の進展がないので、マスコミに話してみたのですが、取り上げてくれませんでした。放送局にも話してみましたが、やはり取り上げてくれませんでした。地震をパーフェクトにあてても、一回でも失敗すれば、人を脅かすことになると言われしました。また、どこかのマスコミでは、人を馬鹿にしたような言葉しか返ってきました。日本のマスコミは一般庶民の言に耳を傾けようとしません。この傲慢な態度があのだ地下鉄サリン事件を引き起こし、エイズ薬害事件を起こさせ、尊い人命が奪い去

られたのです。でもあきらめずに大阪の新聞社に電話をしたところ、すぐに取材に行くとの返事をもらいました。その前に私が明日震度四ぐらいの地震が起きると電話し、それが的中したので、取材をしにこられたので、取材記事は社会面に掲載していただきました。

この記事を機会に、日本地震雲協会と交流させていただき、会員は一〇〇名ほどいるとのこと、私も参加させていただきました。その内容は私にとって大変役立つのです。ここに三つの重要な地震予知の内容をお伝えいたします。

それは大正十二年九月一日の関東大震災を虹によって予知されていたこと、その人は京都の宮津に住んでいた、無名の一市民「棕平」青年だった。その青年の警告など、当時の行政も、学者も無視したのである。

でも今では地震に携わる人のなかには「棕平のアーキ」を知らない人はいないほど有名なのに、なぜか権威ある学者は、今でも認めようとはしない。この間の阪神大震災のときも、前日上空に虹が出ていたのです。

私は平成九年三月二十五日、鹿児島県川内市の震度五強、マグニチュード六・二の地震を虹によって予知したので。ここに

「椋平アーク」の虹による地震前兆現象をここに証明いたします。

もう一つは、今から十八年前、当時奈良市の市長であつた鍵田忠三郎先生です。鍵田先生は、四十年にわたつて天体の観測をして、民衆の面前で地震を予知され、地震の市長さんとして有名だったのです。その市長さんが書かれた『これが地震雲だ』という本に、「雲はあなたを大地震より救つてくれるのです。」「雲は嘘を言わない。」「今、地震雲しかない。」「地震を顕著に教えてくれるのは雲だけだ。」などと、地震について詳しく書かれています。

しかし、気象庁が地震雲という雲は存在しないと発表したため、この本は問屋が取り扱わなかったのです。世の中に出ず、幻の本となつてしまったのです。私がこの本はじめて接したとき、私の観測と一緒にではないかと、正直に言つて感動したと同時に、もう二年前に出なければ阪神大震災で七千人の尊い生命が救えたのにという思いでいっぱいでした。この鍵田忠三郎先生の地震予知を認めなかった当時の行政の責任および権力によつて否定した人たちの罪は計り知れないほど重いことを知るべきである。

あの有名な作家の住井さんが、正義が権

力に負けたとき、人々は不幸のどん底に突き落とされると言われた。その言葉は、まさにこのことにあてはまるのではないだろうか。この狭い国土に、しかもいつ大地震に襲われるかもしれない今、地震で大津波に襲われたらどうなるのですか。津波は海岸の水を遠くへもつていくのです。原子力発電所は海水で冷却しているのです。その時原子炉は空焚きになるのです。チェルノブイリの二の舞になるのです。全国民が、この鍵田さんの本を読んで、全員がアンテナとなつて、この国を救わなければならないのです。

地震が雲によつてわかるということ、七百年数十年前にこの日本の地に誕生された日蓮大聖人が述べています。今は国宝となくっている「立正安国論」の中の金光明經というところに、

「彗星しばしば出で両日並び現じ薄蝕恒無く、黒白の二紅不詳の相を表し星流れ地動き……」

とあります。地震は空に現象が出ること、つまり天と地は一体であることが証明されているわけです。

地震を科学的に予知するための研究はもちろん大切です。しかし、一刻の猶予もな

い今、地震の予知を研究された偉大な先駆者の言葉に素直に耳を傾け、その教えを請うべき重大なときに全民衆が立たされていることを認識すべきです。そして、この忠告を無視すれば日本の国の存続が危ういということを認識しなければなりません。地震は同じ場所で起きるのです。福井も東海も過去に大地震に見舞われているのです。起きる地震を人間は止めることはできません。地震に対する最大の防御は、地震の前兆を知つてそこから逃げることです。勉強して自分の身は自分で守るしかありません。「地震雲を科学的に説明せよ」と言っている学者の人々は、鍵田先生の本を読んで、自ら空を見て雲を見ていけば「地震雲を科学的に説明せよ」とは言わなくなるでしょう。

昔から「自然のことは自然に聞け」という諺があるではありませんか。私も役所の人に人々を地震から救うためにこの本をもつていきましたが、返つてきた言葉は「気象庁に従います。」だった。日本の行政はどこもお上に対して逆らえない。何と情けない国なのだろうか。そんな人間に私はなりたくない。

著者は、明治三十八年の中学時代（現在の高校）に『吾輩は猫である』を読み、すっかり夏目漱石に傾倒し、地元新聞に読後感を投稿したりしていた。

卒業後、東京大学へ進学。二十二歳の時、入院中の夏目漱石を見舞い、門弟に加えてもらっている。

その後、「漱石全集」の編集にも関わったり、自らも短編小説を投稿している。その中から十八編を収録した「冥途」が出品されたのが三十三歳の時。

しかし、翌年の関東大震災で「冥途」の印刷紙型も焼失。また、機関学校も崩壊焼失し、嘱託教官も解任となった。

十六歳の時に、父の死去に伴い実家の酒造業が倒産し、困窮した時代を過ごしてきたが、震災がそれに追い打ちをかけた。

本書は、師の夏目漱石や芥川龍之介ら漱石門下の文人たち、また、著者の友人、知人、弟子たちを見送ったときの随筆をまとめた追悼文集。

最初に、「漱石先生臨終記」（『中央公論』昭和九年十二月号）が収録されている。そこには、生活が困窮して、師に借金をお願いした時の場面が綴ってある。

読書案内

松田銘道



内田百閒 著
『追懐の筆』

中公文庫
定価 一〇〇円

初めて借金を申し込んだのは、手放せない大事な品物を質に入れたまま期限がきても受け出す金が無くて、どうしているか分からなくなつた時。

誰にも打ち明けていない「秘密の話」を聴いてもらいたいと前置きし「た上で、「どうかお金を出して、質を受けて下さいと頼み込んだ」ところ、「その位のことも知らないのか、利子をやればいいのだと云つて笑」い、利子がいくらになるのか調べるよう指示し、その分を差し出してくれたという。

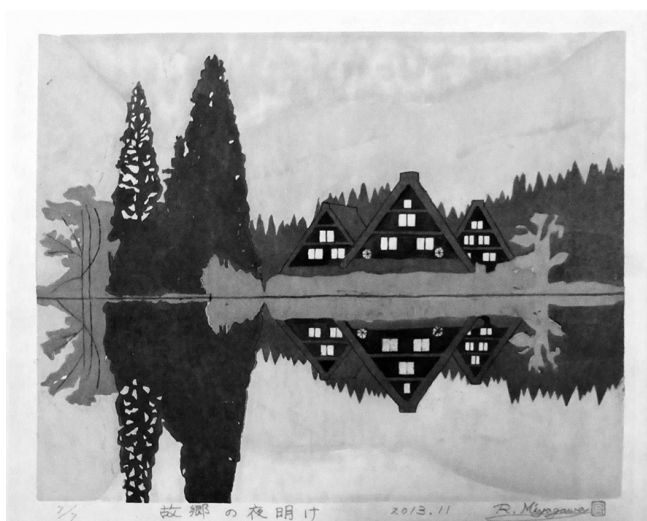
それでも、大勢の家族を背負っていて、困窮生活が続いた。そこで、どうにもこうにも暮らしが立たなくなつて、叱られるのを覚悟で自宅を尋ねた。

湯河原の旅館に滞在中であつたので、手元に残っているわずかなお金を旅費にあて、訪問した。事情を話したところ、叱りもしないで、大金の手配をしてくれたという。

貧乏時代を支えてくれた師とのエピソードを描くことで、辛い別れを受け入れようとしている気持ちが伝わる追悼文である。その他、大事な人を偲ぶ逸話を収録。

作品を贈呈します！

この度、宮川力夫さんのご遺族より、追加で作品をご寄贈いただきました。ご希望の方に贈呈いたします。（先着順）
複数枚あるものもありますので、お一人で複数枚ご希望の方もお申し出下さい。なお、今回の分は版画のみで、額はつきません。



今回寄贈いただいた宮川さんの版画作品一覧

 ■ KMP IPTC EXIF ICC bかわせみ JPEG Grayscale (v1.1) 3508x2481x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC bダイヤモンド富士 JPEG Grayscale (v1.1) 1972x1557x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC bやませみ JPEG Grayscale (v1.1) 2149x2763x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b愛でし旭日富士 JPEG Grayscale (v1.1) 2425x1828x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b蕪風騒乱 JPEG Grayscale (v1.1) 2580x3615x8
 ■ KMP IPTC EXIF ICC b故郷の夜明け(白川郷) JPEG Grayscale (v1.1) 1886x1512x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b濠と石垣 JPEG Grayscale (v1.1) 1928x1558x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b庄屋 JPEG Grayscale (v1.1) 1779x1451x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b水路と家 JPEG Grayscale (v1.1) 3479x4716x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b成長(菊) JPEG Grayscale (v1.1) 1690x2277x8
 ■ KMP IPTC EXIF ICC b雪樹 JPEG Grayscale (v1.1) 1463x1771x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b楡ヶ岳 JPEG Grayscale (v1.1) 2403x1764x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b竹林 JPEG Grayscale (v1.1) 1353x1691x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b天空の竹田城 JPEG Grayscale (v1.1) 1764x1449x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b馬 JPEG TrueColor (v1.1) 1805x2363x24
 ■ KMP IPTC EXIF ICC b晩秋 JPEG Grayscale (v1.1) 1933x2425x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b晩秋2 JPEG Grayscale (v1.1) 3579x2532x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b母校 JPEG Grayscale (v1.1) 2019x1602x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b瞑想 JPEG Grayscale (v1.1) 1305x1711x8	 ■ KMP IPTC EXIF ICC b芒騒ぐ晩秋の高原_0000 JPEG Grayscale (v1.1) 1960x1606x8

恵日だより

ご案内・お知らせ

*諸行事のご案内

◆第五十回源立寺法華講総会……今年の法華講総会は、昨年に引き続き、コロナ禍の状況を踏まえ、中止といたします。

なお、当日は、月例の法華講お講を、午後一時より奉修いたします。
※参列をご希望の方は、予め、本堂控え室の名簿に記入するか、お電話にて受付にお申し込み下さい。

◆法華経講義……五月度の法華経講義（五月二十三日〔日〕午後二時）は、コロナ禍の状況を踏まえ、中止といたします。

◆一日研修会……本年度の法華講一日研修会（六月二十七日〔日〕）は、昨年に引き続き、コロナ禍の状況を踏まえ、

中止といたします。

【皐月詠草】

〔和風〕

ラジオより 突如流れる 長男の
日毎唄ひし 「ルビーの指環」
やうやうに スマホデビュー 果たしたり
まずは送信 娘と孫に

〔故奥はつ〕

幾百年の 歴史秘むるや 大公孫樹
わが歌垣の 秋を彩る

【恵日俳壇】

〔農婦〕

春愁や五分遅れの古時計
砂吐いてかたりと動く浅蜷あさりかな

〔森秀之〕

太閤も惚れたみ吉野山さくら
息きらし登れば見ゆる山桜
西行や佇む庵に桜舞う



【日曜講話】

未来を信じて今を生きる

最近、断捨離ということがわれており

ます。いろいろなところで断捨離が言われているのですが、それも自分たちの生活の中の贅肉をそぎ落として、必要などころだけを残していくのであればいいのですが、年を取ってすべてのことから引っ込んでしまおうという風潮が進んでいるようです。

日本の国は、世界的にも最も進んだ高齢社会ですから、そういう考え方が主流になって、だんだん閉塞的になっているようです。

あの木彫家の平櫛田中^{ひらぐしでんちゅう}に、

「六十七十ははなたれこぞう おとこざかりは百から百から わしもこれから」という言葉がありますが、田中は百歳近い

ころに、木彫の材料にするための上質の銘材をストックしておくために、すでに日本にはなかった銘材を求めて、その頃まだ立派な檜や樺が残っていた台湾に、輸出禁止前の駆け込みで、大量の材料を輸入したといっています。

れてどうするんだ。」

と言われたらしいのですが、

「わしは、百二十まで頑張るんだ。」
と言ったという有名な話があります。

そのように、芸術家というのは、たとえ九十歳・百歳になっても、未来を見据えて、その努力を重ねていくものだと思うのです。

また、富岡鉄斎は、七十八歳の頃に、息子を亡くしたのですが、年が離れていた息子の子である孫は、小さい子供だったようで、その子供の養育のために急に頑張りだしたそうで、そこから画境が開けて、八十歳以降に優秀な作品をたくさん作ったと言われています。

この人も、百歳近くまで生きたのですが、若い頃はあまり良い作品が出来なかったけれど、孫を残して息子が亡くなったことで発奮して頑張ろうという気持ちが起こったのでしょうか、それ以来急に腕が上がったと言われているのです。

もちろん本宗の宗祖日蓮大聖人は、

「日蓮がたましひは南無妙法蓮華經にすぎたるはなし。」（全集一二四頁）

といわれて、末法万年の未来までも、

「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外未来までもながるべし。」

と仰って、常に未来を見つめておられたのです。

今はその未来のために、種を植える時だという信仰に徹しておられたことは、ご承知のことだと思えます。

日興上人の辞世にしても、あるいは日目上人の辞世の歌にしても、常に末法万年という未来を信じて今を生きるという生き方をされたのだと思うのです。

このような社会ですから、どうしても後ろ向きな思考になりがちですが、法華經の信仰は、常に未来を信じて、今種を植える時だという、本因下種ということが、信仰のきまりになっているのですから、そういう信仰をしていってこそ、不老不死という我われの身は亡びても心は靈山に住むべしといわれた信仰を、我が物とする秘決があるのではないかと思います。

どうか自分の精神においては、日々新たにという心持ちで精進願いたいと思います。



五月の行事



一日（土） 午後二時 お経日

二日（日） 午前九時 講中勤行会

九日（日） 午後一時 お講

十三日（木） 午後一時 お講

※今月の幹事会・役員会は中止いたします。

◆感染防止にご協力を

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のための、緊急事態宣言が発出されています。それにともない、源立寺における諸行事も中止や変更、座席数の制限等に対応しておりますので、法華講の皆様には、ご協力の程、よろしくお願いいたします。

くれぐれも感染予防に留意してお過ごし下さい。

源立寺

※六月号の継命・恵日発送は、

『兵庫』地区が担当です。

七月号の継命・恵日発送は、

『槻木』地区が担当です。

恵日

令和三年五月号 通巻三二六号
令和三年五月一日発行

編集兼
発行人

菅野憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇〇 源立寺内

TEL (072) 751-3135

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp
購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

〒振替 加入者名 恵日編集室会計
口座番号 013801212649